

秋彼岸追悼の文

そもそも秋彼岸なれば、いつの間にか野や田の畦に

まんじゅしやげ

彼岸花が咲き乱れる。実名は曼珠沙華と呼ぶ。釈

尊在世中の言語 梵語より発する。天上に咲く花と

にゅうなん

訳されている。あたかも見る者の心を柔軟にしうるところから由来したという。

そこで、この柔軟にあやかって このたびの追悼文

は、本尊観世音菩薩に甘えさせて戴き、私が日頃通用する「先祖供養」についての思いを素直に綴り願文ならざる一文として捧げることお許し戴きたく、伏し

つかまつ

てお願い申し仕ります。

耐えがたき炎暑も十九日の秋彼岸入りを前に和ら

せい

いだ。重ねて襲来する台風の所為もあつてか、琵琶湖湖南を渡る風もさわやかで心地よい。台風被害を受けられた地域は痛恨の極みなり。慎しんで頭を

たてまつ

垂れ復旧、回復を祈り奉る。

さて、本題の彼岸とは、古代インドで使用された

言語、サンスクリット語によるもので、意味はパラミツ
とうひがん

夕(波羅蜜) 到彼岸と訳される。向こう側の岸といっ
て、悟りの世界を指す。彼岸に到るーつまりは悟
りの世界に到ることを意味するものなり。これに
対して迷いの世界は私どもしの住むこの世、娑婆世
界、此岸である。疾風怒涛逆巻く現実の世の中
ある。や、もすると不安の洪水に押し流されて水
没する娑婆だからこそ、安楽、快樂けの世界を開こ
うとして仏教の教えがある。

さらに日本では古くよりお彼岸の時期を契機
として先祖を供養する風習が定着してきた。これ
は先祖が悟りの世界に到れるようにと、生きてい
る者が乞い願ひ供養する行為を押しすすめてき
た。「ひたすらにさ、げる」供養する心は、日本を
ふく含めた東北アジア、東南アジアの稲作文化圏に強
く深く育って、「供養の文化」とさえいわれるぐら
い尊く伝承されてきた。

日本人はおしなべて農耕民族なり。毎日、田畑

を耕し種を蒔く。施肥、肥料を加え水加減をする。結果、実りの秋にはその収穫が米俵何俵という形で現われる。日頃の油断のない努力に対して後から形できっちり成果が示される。だが少しでも仕事を怠れば、秋の収穫はたちまち減って自らの収入も当然減ることになる。これは仏道修行にも似ている。日頃から一生懸命精進修行して煩惱を取り除く。その結果として清浄な心が現れ悟りへの境地へと進むことが出来る。自然の恵みに感謝し、恵みをもたらす仏の力があることを農耕民族の中に深く浸透していったようだ。

ここで先祖崇拜の大切さを確認したい。

先祖とは、世間でいうところの「ご先祖さま」である。つまり、いまの私があるのは、父がいて母がいたからである。その上に、祖父、祖母となる。過去に段階的に血のつながりがある人々がいて、祖とは、「その家系の最初の人、先祖、祖先」をさす。先祖代々とは、その家における歴代の方々の総称で、崇拜とは、あがめ敬うことだ。さらに一歩進めると帰依して信仰することとなる。仏教で

は、開祖であるお釈迦さまの舍利（骨）を崇拜し、
教えを信仰して救済を求め、仏塔に集会、集まっ
て拜むようになったといわれる。

先祖といっても両親、またその両親をたずねる
と、血を分けた世々生々父母兄弟に至る。

すると他人というものは一人もいなくて、重々無
尽にアミの目のようにつながる。壮大な縁起観も
ここから出てくる。

縁起とは持ちつ、持たれつの相互扶助を意味して
おり、言葉をかえると「おかげさま」である。

みんな大いなる命、大日如来の命から生まれ
て源みなもとに還かえるのである。

当山安養寺の山門に入る前に 大きな石柱が
参道の両側一対に立つ。「相互礼拝」と「相互供養」

である。これは弘法大師が人々がいかに幸せにな
るか、濟世利人の道を極められたみ教をきっちり
彫り込んで提示されたものである。もちろん熊谷

俊亮住職の発願建立である。同住職は大師信仰に打ち込んで毎年四国八十八ヶ所霊場を順拝し続けまもなく四十年間の連続を越える。安養寺は実践修行の息遣いが調子づいている。一方、安養寺をこれまで俊亮住職と共に寺門興隆の役割を果たしてこられた直子寺族夫人の七回忌法要がいよいよ来年一月二十一日と決定。このたびの秋彼岸会に一層の思念が涌くもので改めて先祖供養のお彼岸の意義を表白させて戴いた次第である。

乃至法界 平等利益

平成二十八年九月二十二日

京都府向日市寺戸町西垣内

亀光庵

沙門 土口哲光